



TITLE:

Crossover Mixed Analysis in a Convergent Mixed Methods Design Used to Investigate Clinical Dialogues About Cancer Treatment in the Japanese Context(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Hatta, Taichi

CITATION:

Hatta, Taichi. Crossover Mixed Analysis in a Convergent Mixed Methods Design Used to Investigate Clinical Dialogues About Cancer Treatment in the Japanese Context. 京都大学, 2019, 博士(医学)

ISSUE DATE:

2019-01-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13222>

RIGHT:

許諾条件により本文は2019-08-20に公開; It is acceptable to publish the thesis to KURENAI, 12 months after its publication in "Journal of Mixed Methods Research".

京都大学	博士（医学）	氏 名	八 田 太 一
論文題目	Crossover Mixed Analysis in a Convergent Mixed Methods Design Used to Investigate Clinical Dialogues About Cancer Treatment in the Japanese Context (がん医療現場における対話の分析：収斂デザインとクロスオーバー分析を用いた混合型研究)		
(論文内容の要旨)			
<p>がん治療は、患者と医療従事者とのより良い人間関係を基盤として成立しており、関係構築の視点や患者中心の視点から、共同意思決定プロセスの質的改善が求められている。それを実現させる上でインフォームド・コンセント(IC)は重要な役割を果たす。IC は 1980 年代に日本に導入され、がん医療の現場で実践されるようになった。その後 IC の形態が問題となり、1996 年には厚生省検討会が IC のあり方を論じ、患者と医療従事者との関係構築や共同意思決定の場として位置づけた。2000 年代には外来化学療法が重点化され、安全に治療を進めるために、患者は IC に対してより主体的な関わりが求められるようになった。</p> <p>従来の IC の研究では、プロセスや対話などを記述する質的手法、または患者の心理状態を数量化して評価する量的手法のいずれかのみを用いるものであったため、IC で生じる複雑な現象を捉えることが困難であった。このため、臨床場面で起こる現象を詳細に解析するためには、質的手法と量的手法を統合した研究手法である混合研究法が必要であると考えられる。</p> <p>本研究は、患者の医療に関する動機づけと対話の継時的変化との関係を混合研究法によって明らかにすることを目的とし、化学療法導入のための IC 観察研究を実施した。対象患者は、肺がん専門医 1 名と IC を行った肺がん患者 10 名、乳がん専門医 1 名と IC を行った乳がん患者 10 名である。本研究の主要な量的データは IC 前の患者の動機づけスコアであり、以前に開発した「医療に関する達成動機尺度」によって測定した。主な質的データは、IC の観察記録および対話の録音に基づく逐語記録である。</p> <p>本研究では、混合研究法の中でも最も一般的に用いられる収斂デザイン(convergent design)を採用した。このデザインでは、質と量のデータを同時に収集した後でそれらを分析し、分析結果を比較することで統合を試みる。さらにこの統合のために、クロスオーバー分析(cross-over mixed analysis)を採用した。これは分析工程を細分化し、前段階の分析で得られた結果を次の段階の分析に活用して、段階的に質と量の分析を行うことで統合を試みるもので、以下に示すように、①質→②量→③質→④質の順で分析を進めた。</p> <p>①肺がん患者と乳がん患者 20 名の IC の内容を探索する質的分析によって、医学情報の交換を示す対話、および医師が患者を遇する社会的心理的やりとりを示す対話を同定した。②量的分析として記述統計を示し、肺がん患者と乳がん患者それぞれから動機づけスコアの高い患者 2 名および低い患者 2 名を選出し、計 8 事例を次の質的分析の対象とした。③8 事例の継時的変化を探索する質的分析を行なったところ、「起承転結」構造が適応可能であると考えられた。この構造を 8 事例に当てはめ、各事例の継時的変化を説明することが可能であ</p>			

<p>ることを検証した。さらに、④質的な「起承転結」構造と量的な動機づけスコアを対比させて解釈したところ、起・承では患者の動機づけの高さ/低さと符合する積極的/消極的なやりとりが確認されたが、転では一見すると医療に関与しないやりとりがなされ、結では動機づけによらず医師と患者の間に合意が形成されていることを確認した。以上より、IC は単なる情報提供や紛争予防のための手段ではなく、治療プロセスを貫く「良好な関係」の構築に寄与することが示唆された。</p> <p>本研究は、小規模で限定された対象を観察しており結果の一般化には限界を伴うが、IC に関して混合研究法を用いることで、質と量を相乗的に統合させる方法論を示した。</p> <p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>がん治療は、患者と医療従事者とのより良い人間関係を基盤として成立しており、関係構築の視点や患者中心の視点から、共同意思決定プロセスの質的改善が求められている。近年のがん医療政策により、患者はインフォームド・コンセント (IC) に対してより積極的な関わりが求められている。</p> <p>これまでの IC に関する研究では、プロセスや対話などを記述する質的手法、または患者の心理状態を数量化して評価する量的手法のいずれかを採用するものであったため、IC で生じる複雑な現象を捉えることが困難であった。臨床場面で起こる現象を詳細に描く解析方法を創り出すためには、質的手法と量的手法を統合した研究手法である混合研究法を用いた研究デザインが必要であると考えられる。</p> <p>本研究では、患者の医療に関する動機づけと対話の継時的変化との関係を明らかにすることを目的とし、混合研究法を用いて、化学療法導入のための IC の観察研究を実施した。そして、IC は単なる情報提供や紛争予防のための手段ではなく、治療プロセスを貫く「良好な関係」の構築に寄与することを示した。さらに、混合研究法を用いることで、質と量を相乗的に統合させる方法論を示した。</p> <p>以上の研究は、IC で生じる現象の継時的変化の解明に貢献し、医療現場で生じる複雑な現象を研究の俎上に乗せるための方法論研究として医学健康科学領域の研究にも寄与するところが多い。</p> <p>したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。</p> <p>なお、本学位授与申請者は、平成 3 0 年 1 2 月 1 8 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。</p>
要旨公開可能日： 年 月 日 以降